

# 会議・視察報告

## ワシントンDC出張報告

ERINA調査研究部研究主任 伊藤庄一

5月6～7日、ワシントンDCで開催された“Sino-Russian Relations: Old Patterns, New Realities (中ロ関係：旧来のパターンと新たな現実)”と題した国際会議（Johns Hopkins University, Central Asia-Caucasus Institute とスウェーデンのInstitute for Security and Development Policyが共催）に出席し、筆者も報告を行った。

かつて冷戦（米ソ対立）時代において、社会主義陣営内の対立状況を追究するといった関心から、米国を中心に、中ソ関係研究には相応の研究予算がついていた。それがソ連崩壊後の10年間は、もはやロシアが脅威ではなくなったことを背景に、世界的にロシア研究そのものが下火となり、関連予算の削減が続いていた。ところが最近になって、中国の経済的・軍事的急成長やロシアのエネルギー大国としての国際的発言力の復活といった国際情勢の変化を受けて、政府と学界両レベルにおいて、中ロ関係研究が改めて注目的になりつつある。今回筆者がワシントンDCに滞在している期間内にも、同地では中ロ問題の専門家会議が他にも2つほど並行する形で開催されていた。

筆者が参加した会議では、政治、経済、歴史、軍事といったそれぞれの分野から中ロ研究を代表する錚々たる面々が世界中から結集し、特に北東アジアと中央アジアをめぐる

中ロの協力と対立の構造をどう評価するのかという点をめぐり、活発な議論が交わされた。聴衆に関しても、開催国内外の政府関係者や様々なシンクタンクの専門家等々、当地ならではの顔ぶれであった。

ちなみに筆者は、中ロエネルギー関係のこれまでの軌跡と現状について、「日本ファクター」の位置づけに関する分析も踏まえた上での報告を行った。中ロ間のエネルギー協力問題は、昨今、中ロ研究のなかでも最も関心の高いテーマであるが、両国サイドの一次資料にしっかりと目を通じた緻密な研究が希少なのが実状だ。その点、筆者がこれまでERINA Report等で発表してきた内容は、貢献の余地があるだろう。おそらく、筆者は本会議を通じてQ&Aの時間にもっとも多くの質問を受けていたと思われるが、中ロ関係のみならず、ロシアの資源開発の実態や日中・日ロ関係等々、いくつもの「謎解き」を実演するような感覚で、報告セッションを大いに楽しむことになった。

尚、本会議の報告者20名弱からなる論文は、一冊の本にまとめられ2010年初め頃に、米国の出版社から刊行予定であるが、今後しばらくの間、欧米の大学で用いられる中ロ関係に関する代表的な教科書の一つとなりそうだ。